

私たちの保幼小連携・接続へ ～子どもの具体的・直接的体験をつなげよう～

講師 古賀 松香 京都教育大学教授

1. はじめに

保幼小連携・接続の研修は、以前からこどもみらい館でも行っています。私も何年も前に一度、夏の研修でお話させていただいたことがありました。そこから少しずつ前に進んでいるはずなのですが、なかなか難しいです。今日は、具体的なレベルで保幼小の先生たちがお話できるようなことをお伝えしたいと思っています。

今、ここには、様々な施設の教育、保育に関わっておられる先生方が集まっています。それらが交じり合うことを考えたいわけですが、交じり合うには、「境界」もやはり出てきます。違いを感じつつ、どのようにして少しずつすり合わせていくか、どのようにして間を埋めていくことができるかを考えていただきたいと思います。

2. 京都市架け橋プログラムクイズ

京都市架け橋プログラムクイズを作ってきました。前半は、全国で共通している内容、後半は京都市に限った内容です。答えてみてください。

京都市架け橋プログラムクイズ

- | | | |
|---|---|----------|
| ① | 架け橋期とは5歳児の後半から小学1年生1学期のことまでを言う | Yes / No |
| ② | 保幼小の連携と接続の違いを説明できる | Yes / No |
| ③ | 架け橋プログラムは先進モデル地域の取組のことで、すべての学校区で取り組むものではない | Yes / No |
| ④ | 京都市における連携・接続は、入学してくるすべての子どもの所属先で行うものである | Yes / No |
| ⑤ | 京都市には保幼小の連携・接続に関する専門的な助言を行う架け橋コーディネーターが複数いる | Yes / No |
| ⑥ | 京都市は保幼小連携窓口一覧を作成し、各幼児教育施設及び小学校に配布している | Yes / No |

答え合わせをします。①は間違いです。1年生1学期までは、スタートカリキュラムと言われている頃です。そして、5歳児の後半は、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿が見られるようになっていくアプローチカリキュラムと言われている頃です。繋げていくという意味で、以前はアプローチとスタートで考えていましたが、架け橋期はもっと広く捉えようということで、5歳児から1年生の2年間を指します。

②はどうでしょう。保幼小の連携は、大人同士の関係を作っていくという連携組織のことです。連携のためには、やはり誰が窓口になっているのかということが大事になります。接続は、カリキュラム＝中身、教育の内容を繋げていく、中身の接続のことです。

③は間違いです。架け橋プログラムは、全国で取り組み、推進していきましょと、文部科学省が進めています。全国区で、取り組むものです。

④も間違いです。ここで言っている連携・接続は、架け橋期の連携・接続です。例えば、入学してくる子どもの出身が50以上の幼児教育施設からとなる場合もあります。通園区はとても広く、バスが通っているところもありますが、通学区は基本、徒歩通学です。そこにズレがあります。これは京都市に限った話ではなく、全国的に言えることなので、小学校区の中にある幼児教育施設を基本とした連携・接続を組織として作っています。例えば、一緒に保育や授業を交流したり、学び合ったり、生活科の楽しいことに園児たちが呼ばれたり等の、具体的な小学校って楽しいなと思えるプログラムを進めていくのは、小学校区を中心として考えていきます。各幼児は、入学前の検診等

は入学先に行きますが、それと架け橋期の連携・接続は別で考えます。京都市における架け橋期の連携・接続は、基本的に学校区で考えます。しかし、学校区の中に幼児教育施設がないところやいろいろな事情がある等の様々な学校区もあります。そこは保幼小間で連携、連絡し合って、決めていくことになります。

⑤は、正解です。コーディネーターの先生方が、専門的な助言を行う先生方になります。これは京都市オリジナルの取組ではなく、文部科学省が専門的な助言を行う架け橋コーディネーターを導入するといっていると発信しています。この流れの中でコーディネーターの人数を増やしてきている自治体が多くなっています。京都市には、複数頼りになる先生方がおられます。

最後⑥も、正解です。これは既に各校園所に送られています。連携先や担当者名がわからないと、最初の一步がとても大変です。特に、学校区の中にたくさんの幼児教育施設がある小学校の先生は、大変だろうと予想できます。そこで京都市は窓口一覧を作成し、各学校区の中にある幼児教育施設の保幼小接続の担当者や、連絡先を分かるようにしています。まだ見たことがない方は、各校園所に帰って、確かめてみてください。

こうして、架け橋プログラムは全国津々浦々で前に進めようと取組を進めています。

保幼小接続は、日本だけの課題ではなく、世界的な課題となっています。2000年頃から、幼児教育の重要性が明らかになり、国の予算を使って、幼児教育に取り組んできました。幼児教育で遊びを大事にして、十分に育った子どもたちにとって、その先が接続されていないと、伸びてきた部分が折れてしまったり、戻り現象が起きてしまったりすることがあります。小学校との接続というのは、OECDの報告書のテーマになるような、世界的な教育課題になっています。

3. 日本の子どもたちの今とこれからの社会

日本は、どうでしょう。今の目の前の子どもたちが、これからの社会でどう生きていくのかを考えて、今の教育を作っていけないといけません。

O P I S A 2 0 2 2 3分野世界トップレベル

②「P I S A」とは、国際機関であるOECD（経済協力開発機構）が行う、世界的な学力調査

私たちの国は、非常に知的レベルが高い国です。P I S Aのテストが行われる度に、その順位に、1位だ、2位だと、一喜一憂するわけです。2022年は、レベルがかなり高かったです。コロナ禍の頃でしたが、学校をあまり閉めず、教育活動を行っていたのが、日本の特徴で、その結果、P I S Aのテストもかなりよい結果でした。それをOECDは、コロナレジリエントが高いと評価しました。一方で、同じ調査の中の「学校が再び休校になった場合に、自分で学習を行う自信がありますか。」という質問に対して「自信がない」と回答した生徒が、日本は37か国中34位と、非常に多い結果でした。日本の子どもは、自分で学ぶ自信がないのです。自分で学ぶことに自信がないことの危機感を先生方は、お持ちでしょうか。「これから何が起こるか分からない世の中を生きていくときに、『教えられる存在』として育っているのか?」、「自分で世の中で起こっていることを考えるように育たなくて大丈夫か?」と不安になります。そして、小中学校における長期欠席者がこの2～3年、前年度比で22%という異常な増え方をしているというデータも大きな衝撃を与えました。一番増えているのは不登校で、学校に行かないという選択をする子どもが増えていきます。もう一つ、いじめの認知件数も過去最多です。このように学校関係のビッグデータでとても心配なことが出てきています。これらは、毎年全ての学年で、増えている状態です。こういうデータを見ると、日本の子どもたちは、学校で何を学んでいるのか、どう生活しているのかをどう捉えたらいいのかと思います。

その一方で、社会では、外国人労働者数が増えています。京都で言うと、留学生や研究者も流入しているので、かなり人数が増えているという感覚があると思います。2023年に初の200万人越えとなり、様々な業種で外国人労働者が増えています。今までは、製造業の方が多かったのですが、徐々にホテルの受付に行っても、必ず外国

人の方がおられる時代になってきました。様々な業種で外国人の方が働いています。今の子どもたちは、社会に出て、様々な国の人や、多種多様な人たちと共に働く時代を生きることになります。

そして、もう1つ社会の変化が大きく見られるものが、生成AIです。すごく便利で、企業等では、どんどん使っていく流れにあります。シンギュラリティとは、AIと人間が同じレベルになると言うところがポイントで、2045年ぐらいからだと言われていましたが、昨年、生成AIが出てきて、世の中が大きく変わっていききました。もうすでにシンギュラリティは来ているのではないかというくらいのスピードで、生成AIの精度が上がってきています。様々な人が「ググる」という言葉を当たり前に使っていると思いますが、これからはChat GPTで検索したり、アドバイスをもらったりすることが普通になっていくと思います。相当なスピードで普及していて、原稿作成やチェックを利用している人は、40%くらいいます。著作権がかかるところは低ですが、絵をかいたり、作曲ができたりする生成AIも出てきています。日本のビジネスパーソンへ、「業務で生成AIを使っているか」とアンケートを行うと、5月時点から10月時点で、大きく増えていて、今後使っていく人が増えていくと考えられます。お茶のボトルや車をデザインするときには生成AIを使うなど、企業は生成AIを使うことが当たり前になってきています。そして、生成AIを使ってできたものをそのまま使うのではなく、それを使って人間が改善したりしています。また、顧客の問い合わせに対して、どう答えるのかのモデルを作ってくれたり、従業員が知りたいことを言葉で問い合わせるだけで、適切な過去の改善事例を答える仕組みの「カイゼンGAI」というものもできています。

4. どんな子どもを育てたいですか

今、このように世の中がどんどん進んでいっている中で、働き方も、物の作り方も、考え方も変わってきています。私は今まで、英語での学会発表を考え、論文等を校閲業者に出していました。

その場合、1か月経て、返ってきたものを見て、書き直します。すごく時間とお金がかかりました。しかし、Chat GPTに入れたら、一瞬で校閲されて出てきます。そういうところにお金が必要なくなってくるのです。そんな風に様々なことが便利になっていく中で、私たちは何を生み出すのでしょうか。子どもたちはどういう社会で生きていくのかを考えていかなければなりません。もしかして、今、学校に適応しにくく、自分と他者との間の調整がうまくいかない子が多くなってきているかもしれません。そういう子どもたちの実態が一方にあり、もう一方の社会には、様々な国から人が来たり、様々な価値観と交じり合いながら、ロボットとも一緒に働いていくという時代があったりするわけです。『教えられる存在』として子どもたちを育てていたら、そういう世の中に対応できるのか？ということを考えなくてはなりません。多様な人やAIと共生していく時代です。その共生する時代を生きる子どもたちに、どんな力をつけさせたいと、願いますか？グループで話し合ってみましょう。

<グループ協議>

自己紹介（様々な校種の5人グループ）

「多様な人やAIと共生する時代を生きる子どもたちに、必要な資質・能力はどのようなものだと思いますか？」

<発言例>

- ・ 自分の気持ちや思いを言葉にできる子が少なくなってきました。AI等が発達する中で、自分の力で思いを伝えること、気持ちを言うこと等が大事だと考えました。自分の力で自分の思いを伝えたり、友達の思いを汲み取りることができる力をつけたいです。
- ・ 情報を理解する力が、今後必要になってくると思います。しかし、目の前の子どもを考えたときには、まず様々なことを経験し、自分自身で様々なことを受け入れたり、受け入れられたり、自分自身の思いをきちんと伝えていくことができる子どもたちを育てていきたいという話になりました。

- ・ 子どもたちに接していく中で、答えのないものを探したり向き合ったりし、時には失敗を経験しながら、失敗に向き合っていく時間を増やし、これから先、現時点でもないような課題に対応していけるような子どもの心を育てていきたい、と話し合いました。

C h a t G P Tにかけると、まるで何にでも正解があるかのように答えが出てきます。しかし、それを鵜呑みにせず、「本当に正解なのか？」と、疑問を持ち、自分の感覚を頼りにもう一回考える。それから、「自分はこう思うのだけれども、あなたははどう思う？」と他者と一緒に考えたりして、新たな考えに出会ったら「なるほど。でも、自分が考えている考えもあるのだけど、どう？」と調整したり等といった経験を山ほどしてほしいと思います。元々あるものや指示されたものを受けとめるのではなく、また、例えば自分が好きなチャンネルだけを見るというものでもなく、やはり、幼児教育施設や小学校に行くと、多様なものに出会ったり、多様な価値に出会ったり、多様な考えに出会ったりします。その中で、悩んだり、驚いたり、様々な感情が揺さぶられたり、時には傷ついたりするかもしれませんが、それらに何とか耐えて、お互いに支え合って、より楽しい方向をつくっていくことが希望として見えているようにしたいものです。一緒にいることが苦しいと感じれば、幼児教育施設や小学校に行きたくなくなります。ぶつかり合ったけれど一緒に考えて、新しいことを生み出せて良かったとか、あなたと一緒に考えたことで、私にはなかったものを知ることができたとか、それが明日の遊びや活動を豊かにするという風に思えて、（楽しみだな、明日やっぱり行きたいな）と思うことを経験してほしいと思います。ここまでは、先生方、大人の立場からのお話で、どんな子どもを育てたいかというお話をしてきました。

5. 権利主体としての子どもと保幼小連携・接続

もう一方で、こども家庭庁を中心として、社会に発信しているのは、「子ども側から見てどう

か？」ということです。例えば、子ども側から見て、今、学校で行われている学習はどうか？幼児教育施設での保育ってどんなものか？等、聞き取ったりしています。権利主体としての子どもが、より一層注目され、当たり前の世界になっていくだろうと思います。

○ こども関連施策も小学校との接続を視野

こども関連施策も子どもを中心として捉え、子どもを権利主体として見て、実施されています。例えば、子どもの意見表明権（子どもが自分の意見を表明する権利とその意見が尊重される権利）を大事していこうという流れになってきています。

令和5年4月に「こども基本法」ができ、それに基づいて「こども大綱」が令和5年12月に策定されました。その中で「こども・若者を、多様な人格を持った個として尊重し、その権利を保障し、こども・若者の今とこれからのための最善の利益を図る」ということを言い切っており、「こどもまんなか社会」を目指しています。全てのこども・若者が、どんな状況にあっても、どんな家庭環境にあっても、身体的・精神的・社会的に幸福な生活（Well-Being ウェルビーイング＝よりよく生きるというようなこと）を送ることができる社会を目指しますと言っているのです。その時もう1つ、「はじめの100か月の育ちビジョン」というものが閣議決定しました。

こども家庭庁には、「はじめの100か月の育ちビジョン」についての様々な映像や資料が上がっています。目指しているのは、専門家だけでなく、保護者だけでなく、地域の方とか、今までなら子どもや子育てに関わってこなかったような人たちにも、「はじめの100か月が大事ですよ」と伝えていこうということです。より広く国民一般に「はじめの100か月」っていうのが大事なのだと、発信しています。皆さんが関わっている子どもたちの今の発達が、その後のWell-Being ウェルビーイングに大きく影響を与える、とても大事な時期です。だから社会全体で、「はじめの100か月」を大事にしましょうねと

呼び掛けているのです。「はじめの100か月」というのは妊娠期の10か月から7歳頃までのことです。この中には、小学校も入っています。小学校の1年生を含めた「はじめの100か月」が、子どもの人生を大きく支えていく非常に重要な時期ですということを書いています。その中で、大切にしたいビジョンを5つにまとめています。

ビジョン1：こどもの権利と尊厳を守る。これは基本的なことなのですが、子どもの安心したい、満たされたい、関わってみたい、遊びたい、認められたい、という5つの欲求を大切にしていくこととしています。それを十分に満たすために、乳幼児期に大事なのはやはり遊びです。とにかくいろんな意味で人と関わりたい・これ触ってみたい・見たい・やってみたい等、たくさんの「たい」が出てくるような生活が十分に送れるようにしましょうと書いてあります。

ビジョン2：「安心と挑戦の循環」を通して、こどものウェルビーイングを高める。子どもは、安心感を基盤として、遊びと体験を繰り返しながら成長していきます。様々な人との安定的な情緒的な基盤が必要です。乳幼児期の安心安定となると、母子関係の愛着という印象をもたれる方が多いかもしれませんが、母子関係だけでなく、保育者とのアタッチメントが、その後の小学校の先生との関係の基礎となっています。乳幼児期の先生との関係が肯定的な場合に、小学校の先生との関係も肯定的になりやすいということが研究で分かっています。また、幼児期だけでなく小学校の先生との基本的な関係性が密であること、信頼出来て、何かあったらこの人に頼ればいいと、密接度が高ければ高いほど、子どもの粘り強さが高くなるという結果が出ています。粘り強さというのは、様々なところで聞かと思いますが、例えば、今日出た宿題があるとして、それを最後までやるとか、ちょっと難しいことに会っても最後まで考えると、そういう粘り強さというのが、その後の人生を支える非常に重要なスキルの一つ、社会情動的スキルの一つだと言われています。その粘り強さに非常に影響があったのは、先生との密な関係でした。そこから、情緒的な安定と

いうのは家庭内だけの話ではなくて学校や園でも大事であるということがわかります。確かに、大人も情緒が安定しなかったら自己発揮できません。様々なことに挑戦してみたいとか、試行錯誤してもいいとか、大丈夫ここは安全だからいろんなことに挑戦していいとか思えるのは、やはりそこに安心安定があるからなのです。

ビジョン3：「こどもの誕生前」から切れ目なく育ちを支える。家庭と幼児教育施設と小学校が、それぞれにばらばらであるという状態が、日本全国だけでなく、世界中にもあり、その中で子どもが困っています。子どもが1人の人として育っていくプロセスにはそれぞれの間の切れ目がありますが、「はじめの100か月」である小学校までは、切れ目なく育っていく社会を大人たちがつくろうと言っています。そして、支えられてきた子どもたちが次世代を支える側になるという循環をつくることも目指しています。

ビジョン4：保護者・養育者のウェルビーイングと成長の支援・応援をする。一人でやらなくても専門職と一緒にやっていきます、ということが書いてあります。

ビジョン5：こどもの育ちを支える環境や社会の厚みを増す。直接子育てや教育に関わっていない人にも、その価値を共有し、全ての人が子どもの育ちにとって大切な役割を担っているということを発信しています。

6. 学びの主体は子どもである

子どもを主体としてみていくとき、学びの主体は子どもであり、子どもが様々な環境に出会い、人と出会い、考えていくということを中心として考えます。それがどれだけ各幼児教育施設や小学校でできているかということが、これからの社会を築く子どもを育むための非常に重要な視点となります。子どもの思いや願いを受けとめ、その主体性を大事にすると考えたときに、子どもの「〇〇たい」という、「WANT」が出てきます。子どもの「たい」がでてくるのが大事です。そして、大人との安心できる関係基盤が、主体性の発揮の土台となるのですが、それは幼児教育でも

小学校でも同じです。ある研究結果からは、先生と子どもの関係が険悪な場合には子どもの粘り強さが低くなるという結果が明らかにされています。それくらい、影響力があります。大人との安心できる関係がとても大事であり、子どもが主体的に生きる権利にもつながります。特に乳幼児期においては、十分に遊ぶことが主体的に生きる権利を保障することだと考えています。子どもが遊ぶことは、主体的にいろいろなことに関わっていくということで、それがまさに子どもが生きることなのです。子どもが生きるということを十分に支えようとしたら遊びが中心となるのです。

遊びとは、遊び時間と言われると余暇みたいな感じがして、余りの時間のような印象があるかもしれませんが、一般的に、遊びというのは、子どもが環境と出会い、関わり、不思議に思ったり関心を持ったりして、「〇〇したい」と自分から思ったり、「〇〇したらどうかな」という風にさらに関わりを工夫したり、試行錯誤したりしていくプロセスです。遊びというと、名のついた遊びのイメージを持たれているかもしれませんが、名のつかない遊びも様々あり、その中で子どもたちは様々なことを感じて考えて、それこそ生き生きと自分の中に取り込もうとしているのです。そのプロセス自体が遊びということを周りの社会の人たちにも知っていただきたい、主体的な学びの過程ということを知っていただきたいと思います。だから、学びの主体として子どもを見るということを、保幼小一緒の価値観としていただきたいと思います。学びの主体として子どもをみるということをどうやったら実現できるか、幼児教育や小学校教育に関わる人たちが学びの主体として子どもをみたときに自分たちの実践をどうつくっていくことができるかということが、大事です。

○ 学びの主体が学びだすように遊びの環境や内容を考える

・幼稚園やこども園の取組の実践写真を見ながら、古賀先生のお話を聞く。

藍染の藍の葉をたたき染めしたタペストリー

が飾ってあります。左右対象に染まっていますが、真ん中に折り線があることから、折った布の間に藍の葉をはさんでトンカチで叩いて染めたことがわかります。葉脈まできれいに見えます。この活動からは、左右対象の形や葉の形に気づいたり、藍で染めると色がいつまでも残るという藍という植物の特徴を知ったりすることになります。そして、絵本の棚に『はながあそび』の本が置いてあったり、自分たちで様々な葉や花を使って染めることができるように素材が置いてあったり等、様々なものに触れられる環境にしています。その環境の中に、「あそびのつながり」が見えるようにしておくことが、教育機関の役割の1つです。そして、そこで子どもたちのやってみたいという気持ちが湧き上がってくるのです。

壁面にはお正月の墨あそびをしたものが貼ってありますが、その右下に、自分の頭文字の落款印（消しゴムハンコ）が押してあります。落款をつくるため、名前を彫りますが、そのまま彫ったら押すと逆さまになるので、逆さまの形を彫るということをトレーシングペーパーで写すことでしています。この落款は、自分でつくっています。この活動の中には、ひっくり返るという仕組みを使って学ぶ、ということが含まれています。遊びの中で「やってみたい」と思ってやっていることが、3年間の中でいろいろと積み上がっていくことを実践している園です。

次は、プロジェクト活動をしている園です。『スイミー』は小学校でよく読む本ですが、近くの海岸に散歩に行き拾ってきた石を棚に並べ、そこに絵本や図鑑を置いて、自然とお話の世界をつなげるような環境をつくっています。そういった環境が、絵本を見たり、自分たちが拾ってきた石やサンゴを使って絵をかいたり、また絵本を見て石に色を塗ったり等、造形活動のようなことをすることにつながっています。そして、「できた」と、飾ったりもしています。

次は光と影です。子どもたちは、影絵遊びが素朴に好きです。この園では少し暗いスペースをつくって、そのスペースで影絵遊びができるようになっていきます。窓際にはステンドグラスをつくり、

光と色を試したり、自分で作ってきれいなものができて嬉しいと感じたり、風船にいろいろ貼り付けて中に光を入れてあんどんをつくったり等、光と影や光と色を、様々な素材で探究していくことをしています。壁には、ステンドグラスのものの形や、作り方のヒントになるような資料が掲示してあります。それを見て、傘や様々な材料から光と色で心ときめくようなものをつくれるというヒントをもらい、自分でもやってみたいと思いつくったりしていきます。

他にも、きゅうりを育てていたときに、きゅうりの葉が黄色くなる事件が起こり、「なぜ黄色くなったのか」とみんなで話し合いをしました。「水をあげすぎたのかもしれない」と思う子どももいれば、「虫に食べられた」と思う子どももいたり、「気持ち悪い」と思う子どもがいたり、様々な意見が出てきました。「では、どうしたらいいか」と考え、「肥料をまく」とか「魔法の水をかける」とか、「水やりをする」とか話し合い、子どもが実行したプロセスがわかるように、先生が写真等で示しています。そして、それをバックボーンとして、みんなが「植えたい」と言っていた種や、子どもたちで育てられるような種をヒントとして置いたり、ニンジンの種等今まで植えたものを置いたりしています。また、以前、米を育てていた経験から、米ぬかは栄養があると思い出し、米ぬかの栄養のある土をつくるときゅうりを育てるのにもいいということを思いついたり、様々な資料をもとにみんなでどうしたらいいか考えたり等、生活の中で様々なことに気づいていくような環境をつくっています。他にも、みんなでつくったものを食べようとなったとき、この園では、子どもたちが火を起こしたいと言いました。そこから、先生と火起こしからするなら、何時に準備したらいいかを考えたり、つくったイモだけではなくいろいろなものと一緒に焼きたくなり何を焼くか考えたり、お味噌汁もつくって食べなくなったり等、一大プロジェクトになっていきました。その後、そのプロジェクトの流れを先生が書いた用紙が壁に貼ってあると、それをヒントとして、子どもたちは自分でも書きたくなりました。例え

ば、アイスクリームのつくり方をまとめています。牛乳・生クリーム等を鍋に入れて、つくりたいと思い、みんなに見えるところに貼っていたり、団子の粉と豆腐とヨモギの粉でまぜる・まるめる・ゆでる、豆腐入りのヘルシーなよもぎだんごをつくりたい、と考えて書いていたりします。

別の場には、染物グループがいます。染物をしたいと思い、染料（食紅）やとってきた植物を使って染めることにしました。しかし、自分たちで染めみると色落ちがひどく、うまく色がつかなかったり、きれいに模様が出なかったりしました。そこで、町に出て、染物屋さんに聞いてみることにしました。聞きたいことを相談して決めておき、染物屋に行って聞いてみました。染物屋さんが丁寧に答えてくださり、染料についてや模様について、また、草木や皮、玉ねぎの皮を使って染める等、様々な方法を教えていただき、活動がつながっていったそうです。

子どもの探究というものがどのくらい広がっているかとか、子どもが自分で考えるとか、他の人に聞きに行ったり等、もっとやりたいことが生まれてくるようなプロセスが自校園の取組の中で生まれているか、考えてみていただけると嬉しいと思います。

7. 架け橋プログラムが投げかけるもの

架け橋プログラムというのは、子どもを学びの主体としてみるということを保幼小でつなげていくものです。そこで、架け橋プログラムが投げかけるものは何かということを改めて考えたいと思います。

○ 子どもの健やかな育ちをつなげよう

子どもの健やかな育ちをつなげようという時に、保育・教育施設が大切に考える教育の形というのが、それぞれにあります。しかし、それぞれが関わる子どもの発達の時期に実現しようとするだけでよいのか、これが架け橋期の問いです。私たちはそれぞれバラバラに、でも大事だと思っているから、この取組は一緒にやっていきます、でいいのでしょうか。これからの社会を生き

ていく子どもたちに対する願いは、私たちは共通に持っていますが、今日出会った先生方や、地域の保育・教育者が連帯・共同して、共に子どもの育ちを見据えて、そこに向かって創造していくという教育共同体をつくっていく時代に入りたいのです。だから、架け橋プログラムをつくり、架け橋を様々なところに架けましょうと言っているのですが、実際、何をどうやったらいいのだろうかと、お手上げみたいなのところもあったりするかもしれません。そこで、どのように進めていけばよいかを先進19地域が研究して、全国に発信をし、取組を広げていこうとしています。

○ Step1. 連携・接続先と知り合おう

まず、連携・接続先と知り合うことが大事です。今日は連携・接続の連絡先が各校園所に届いていますと最初に話しましたが、各小学校と連携・接続に取り組む就学前施設をまず確認してください。実際に入学する子どもとの関係ではなく、近隣校園所同士が実践交流をするということを基本として考えていきます。子どもが、自分が実際に行く小学校を楽しみにすることも大事ですが、子どもが小学校そのものを楽しみにするという経験をしてほしいと考えています。どの小学校もきっと楽しいに違いないと希望をもって小学校に行ってほしいです。様々な事情があると思いますが、全ての子どもが、小学校に行ったらこんなことができるのか、こんな風に学びたいのか、こんな友達とこんなことがしたいと思って、きっとできると、希望を感じて、小学校に行くことができるように、地域の保幼小の連携・接続を進めていきましょう。

その第1歩をどこに踏み込むかは、それぞれの校園所の今の進み具合で違うと思います。もう既にやっていますというところがほとんどでしたら有難いのですが、もしやっていなければ、ぜひ近隣の校園所で園の要覧や学校だより・園だより、年間行事予定等を交換してください。小学校とはやり取りしていても、隣の幼児教育施設とはやり取りしていないという園所もあると思いますが、小学校区で共有することをやっていきましょう。

架け橋というのは、小学校と各幼児教育施設の縦のつながりができることも大事ですが、横のつながりができることも大事だと考えています。幼児教育施設同士が今どんなことをしていますかとか、運動会でどんなことをしますかとか、どんな子どもたちの様子がありますかとか、何を楽しんでいますか等、やりとりすることがとても大事で、このような連携ができるといいと思います。そして、連携・接続関係にある校園所の育てたい子ども像が、それぞれどんな姿なのかということを、知り合ってほしいと思います。似ているところもあると思いますが、細かく考えると違うかなという事もあると思います。その「違うかな？」がつながるチャンスです。そこを「これってどういうことですか」と聞くと、「私はこんな風に、こんなところが大事だと思うんですけども」等の話が、近隣の校園所でできるようになると、何歩も進んだ感じがすると思います。また、互いの連絡窓口を確認して、次年度の年間計画を立てる際、どんな時期にどんなことが一緒にできそうかということを含めて年間の計画を共に立て、情報交換ができるとよいと思います。年間計画を立てる際、交流計画ももちろんですが、事前事後の話し合いが大事なので、できれば計画の中に入れられるとよいと思います。事前の話し合いはやる場所が多いと思いますが、大事なのは事後です。交流をしてどうだったかということがどれだけ共有できるか、事後の話し合いまでをセットで考えてもらえる良いと思います。

○ 遊びで学ぶ子どもの姿イメージを共有しよう

話し合いを進める中で大事なものは、遊びのイメージを共有することです。

<ビデオを見る>

「遊びは学び 学びは遊び “やってみたいが学びの芽”」

文部科学省作成動画（7分20秒）

「遊びで学ぶ」というイメージを共有することが、とても大事です。

○ Step2. 互いの実践から学び合おう

基本的には、連携・接続をしていく校園所の中で、お互いの実践から学び合うということが、ますます大事にされていくと思います。例えば、以前から4月の授業参観に就学前施設の先生方が見に来ている場合、そのときに、どう見るかとか、そのあと何を共有するかとか、そういうところを変えていくのです。ただ、「元気にしていてよかったわ」「久しぶりに卒園児に会えてよかった」と思って帰るのではなく、子どもが学びの主体であるという視点で見るということです。前提としてそれぞれの園所にも学校にも、大事にしている歴史や文化ややり方があるので、それを不用意に批判するのではなく、それぞれが大事にしていることを踏まえた上で、これからの時代を生きていく子どもたちに、今やらなくてはならない教育というのはどんなものかということ、共に考える教育共同体の一員として、その価値を共有しながらやっていくことを目指していきたいのです。もちろんそれぞれの実践現場に抱えている難しさがあるので、それぞれに抱えている難しさを共有しながら、共に受けとめ合うということが基本になります。共感的に受けとめ合うとか、考え合う中でそれぞれの専門性を生かし合う時代に入っていないと、これからの子どもたちが健やかに育つという環境をつくっていくことは非常に難しいと思います。

○ 専門家の交流には共有できる実践のイメージが必要

専門家は、交流してそれぞれの実践力を上げていくことが求められています。そこには具体的なイメージが必要になるので、まずは運動会とか生活発表会とか、どの校園所もやっているような行事のプログラムを持ち寄り、どんなことやっているか、何をねらってどんなことを試みて実際にやってみたらどうだったとか、今子どもたちにこんな課題があって行事を通して乗り越えたいと考えてこんなことを運動会のメニューに入れたとか、そんな具体的な話ができればいいと思います。

他にも、自分のクラスの子どもたちの今の夢中

を語る1枚の写真を持ち寄るというやり方もあります。何枚でもいいのですが、その写真をもとに子どもの姿を語れたらよいと思います。写真に写っている姿が非常に重要で、写真に写っているのは具体的な姿ですが、見ただけでは何かがわかりません。何を楽しんでいるのか、何を学んでいるのかは、そこに居合わせた大人が解釈して知っているというものなので、その大人がこういう風に見取っているということを話すことは、教育に何の価値をもって挑んでいるかということ語り合うことになり、そこが非常に大事です。

また、挑戦したい実践のアイデアを持ち寄るということもできると思います。これは、具体的な内容と一緒に検討をするということです。例えば、アサガオを育てている小学校はとて多いと思いますが、なぜアサガオなのか、を考えてみるのもよいと思います。幼児教育施設では、様々なものを育てています。年齢が上がる毎に、徐々に自分たちで何を育てたいかというのを決めながら育てたりもします。そういう幼児教育施設での経験を踏まえて、小学校で何を育てるか検討しようと思ったときや、アサガオ以外の植物で検討しようと思ったとき、園では何をどんな風に育てているのか等、聞いてみてください。他にも、園では、一人一鉢で育てたり、クラスで育てたり、グループで育てたり等、様々な育て方をしています。さらに、プランターで育てたり、畑で育てたり、自分のクラスの保育室を出たところで育てたり、散歩先の畑で育てたり等、様々なやり方があるので、どうしているのか聞いてみて、検討をしてみてください。他にも、例えば、授業で砂場遊びをするけれど、どんな道具があればいいか、5歳のとき園ではどんなもの使っていたかとか、具体的にところで、何かアイデアを持ち寄ることができると思います。実践のアイデアを知ることができたり、相手へのリスペクトというものが生まれてきたりします。知り合うというのはお互いに大事にしていることを知る、大事にやってきた人の素晴らしさを知ることにつながるのです。実践の質を高め合う共同体をつくるのにとてもいいと思っています。

本日は、そんな話し合いをしたいと思います。
演習のヒントメモを出してください。

おそらく自校園所で何かを育てていると思います。チューリップでも金魚でも、子どもたちが育てているものを何か挙げてください。子どもが育てているものとの関わりの中で、どんなことを楽しんでいるかとか、子どもの育ちや学びと捉えられる姿とかつぶやきとかを思い出して、書いてください。

演習のヒントメモ

- ★自園・自校で子どもたちが育てているものを挙げてみましょう。
- ★子どもは育てているものとの関わりの中で、どんなことを楽しんでいますか。
- ★育てているものとの関わりの中で、子どもの育ちや学びと捉えられる姿、つぶやきを思い出してみましょう。

書き終わったら、グループセッションを始めます。それぞれが実践を紹介し合った後、こんなこともできるかもねという、新たなやってみたい、先生方の「たい」を考え合ってください。

<グループ協議>

- ・今後の「育てる活動」において、さらに子どもの「～たい」が生まれるような活動として、どんなことにチャレンジしたいか？
- ・今日の内容やグループワークで知り合った先生方との話をヒントに「新たなやってみたい」を考えてみる。

<発言例>

- ・一人の先生の実践をもとに話し合いました。
「こども会議」という映画をみたことから、ルールは「子どもがいろんな意見を言っても否定せず受けとめる、最後まで聞く」ということのみ決めて、小グループで子どもたちが話を進めていくという取り組みをされました。先生もコーディネートしたいとかコントロールしたいと思う気持ちを我慢して見守られたそうです。小学校としても、そういう授業展開をしていか

ないといけない時期。子どもが考えたい・学びたい思いを大事にしていきたいという話になりました。

- ・1年生はなぜアサガオかということを考えました。小学校の先生から、アサガオは発芽が速い、葉の成長の変化がよく見える、開花の喜び、開花からの色水遊び、種取り、冬はリースづくりまですることができるということを聞き、就学前施設の先生で、アサガオに代わる可能性をふんだんに秘めた植栽を提案し合いました。やってみたいことをいかにみんなで考えられるかという可能性を探ることができました。

素朴に自分たちが思っている疑問を聞き合うというのは、素晴らしいグループワークだと思いました。それに、今、実践を共有する中でそれぞれがどんな子どもの姿を大事にしてきたのかとか、何をねらってどんなことをしてきたのかとか、それこそアサガオをどうして育てるのかとか、どうしてツルをリースにするのか、何をねらってどう育てていくのかということが考えられたと思います。その中で、例えば思いもよらない子どもの姿が出てきたり、つぶやきが出てきたりしたときにどうするか等、そういうところでそれぞれの実践が見えてくると思います。そして、それがまた聞いている側にも、新たなヒントとなったり、これからこんな風に教育を変えていくという方向性があるという風に感じてもらえたりしていたら、とても嬉しいと思います。

○ 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を共通言語として活用してみよう

様々な姿が、話の中で出てきていたと思います。動植物を育てるということは、自然との関わり、生命尊重だけでなく、子どもたちは言葉で伝え合ったり、様々なことを考えたりします。命なので倫理的なこともそこには含まれていますし、様々なことに派生していきます。例えば、一緒に教育計画を立てるとか、カリキュラムを立てるとか、より何かをねらって協同的な生活科の何かの活動を一緒にやってみる等するときには、視点をも

っていた方が話しやすいと考えられます。また、次年度の計画のよりよい改善に向かっていくときにも、視点を定めると話がより進みやすかったり、より質が高くなっていったりするヒントになるので、その視点の一つとして、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿や、それぞれの校園所での育てたい子どもの姿やねらっている子どもの姿を、共通語として進めていけたらいいと思います。今日のアサガオを育てる実践についても、参観をするときに、それをヒントにして語り合うということができたらいいと思います。

○ 今のままで十分な実践は存在しない

そこで、基本となるのは、十分な実践というものには存在しないということです。そこがすごく大事で、それは新たな可能性を常に探究するということができるということにつながります。同志として実践を考えると、4つ考えてもらいたいことがあります。「目標を共有すること」、「実践を共有すること」、「視点を共有すること（子どもの思いや願いを見取る視点を共有すること）」、「価値・理念を共有すること（何を大事にして教育に取り組むか）」、この4つが共有できるといいと思います。

○ 架け橋プログラムが目指すもの

＝保育・教育実践相互の質向上

しかし、そうすんなり共有できないというのが、頭に浮かぶ「？（違和感）」、違和感分析のススメという所です。「なんでそう思うのかな」、「なんでそれを大事にするのかな」等が実践のすり合わせをする上でのヒントでもあり、自分が実践においてどうしてそこに疑問を感じるのか、一方で私は何を大事にしているのかということを問い返すポイントにもなります。「あれ？」と思ったり、「ん？」と思ったりとか、その違和感を覚えたところが分析的に捉え直すヒントなので、そこを手掛かりにしていけたらと思います。

○ 完璧な実践もまた存在しない

「すごい！」と思っている実践であっても、も

っと明日の子どもたちの目が輝くということがあり得ます。だから、子どもの姿という具体的な姿を語り合うということが、とても大事です。そして、語り合う上での焦点は、ねらいの姿やいくつかのタイプで焦点化されている子どもの姿、また、その子の目の輝いた時を記録して共有するのもいいと思います。教材や環境構成を視点に置くのもいいです。それぞれの環境の工夫を学び合うとか、教師や保育者のかかわりを学び合う、具体的にどんな声かけしているかとか、どこで見守っているかとか、そういうあたりがかなり細かく違ってくるので、違いの中で素敵なかかわりを認め合うとか、「？（違和感）」となったところを考え抜くとかもいいと思います。疑問を持つということ、疑問を持ち続ける力をもつことは、子どもも私たちも、どちらも大事なことです。

○ 互いをリスペクトしあう教育共同体

互いをリスペクトし合う教育共同体ができることを願っています。子どもが目を輝かせて学ぶという実践が、どこでも実現されるように、共に知恵を出し合って楽しんでつくり合うような、京都の専門家たちの共同体ができてほしいです。連携・接続の現時点を確認し、もう一步先にいくには何が必要か、どんなことを共有できたらいいか、今の自分たちの園所や学校の先生と何を共有し、近隣の園所や学校の先生たちと何が一歩進めるための共有の一手になるか、ということをやぜひ具体的に考え、試し、やってみてください。何が正解とか、これをやれば絶対大丈夫ということはありません。園所・校の様々な条件が重なり合い、様々なことが絡み合っている中でやるのが連携・接続ですから、今いるところでの一歩を考えてつくってみてください。大人がワクワクしてつくる実践は、子どもも必ず目を輝かせます。

令和6年度第5回共同機構研修会

令和6年8月1日

於：京都市子育て支援総合センター

こどもみらい館